様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２６ 年　 ６ 月 １９ 日現在

機関番号：３２６９４
研究種目：基盤研究(C)
研究期間：2011～2013
課題番号：２３５３０６９６

研究課題名（和文）ヨーロッパ辺境地域における地域文化の越境性と境界性

研究課題名（英文）Characteristics and transnational tendencies of national/regional culture in European border nations or regions

研究代表者
定松　文（Sadamastu, Aya）

恵泉女学園大学・人間社会学部・教授

研究者番号：４０２８２８９２

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　3,900,000円、（間接経費）　1,170,000円

研究成果の概要（和文）：本調査研究において、リトアニア、スロベニア、コルシカの国と地域はEUの加盟過程でそれぞれの文化の再解釈を行い、それぞれが対峙する他者が異なるために異なる文化的実践を行っていると暫定的に確認された。EU基準への準拠、世界遺産への登録や観光地化、市場経済、人の移動によって、標準化のような越境性の空間的実践が多くみられる中、領域をまとめる集合的紐帯の文化実践では、隣国の権力の強弱、人口規模、主要産業、政治体制の安定性、占領経験を含めた歴史、EU制度との親和性の差異が文化の表象よ表現に差異をもたらしている。特に旧共産圏において、旧ソ連そして現ロシアとの政治的・経済的関係に影響されている。

研究成果の概要（英文）：Three nations/regions, each performing a reinterpretation of their culture while in the process of EU integration, were confirmed temporarily when they performed a different cultural practice because of different political circumstances and economic survival strategy. Cross-boundary spatial practices appear in the manner of conforming to EU standards, applying for registration as a world heritage and/or sightseeing spot, or standardizing the results and forms of migration and the market economy. The cultural practice of creating collective bonds to integrate a territory causes differences in cultural representation due to the strength or weakness of the neighboring country's power, the population scale, the main industry, the stability of the political system, the area's history including occupation and liberation experiences, and the affinity with the EU system.

研究分野：社会学

科研費の分科・細目：社会学

キーワード：地域研究　ヨーロッパ　文化の政治　辺境　トランスナショナル　ラトヴィア　スロヴェニア　コルシカ

１．研究開始当初の背景

近年 U.ベックのグローバル社会論、「第二近代」の議論の展開の中で、社会の編成の再解釈が進む一方で、民族の創造性や構築の側面が強調される傾向とあいまって、地域社会論や地域文化論においても、固有性よりグローバルな流動性の中で地域が再構造化されていく様相をとらえる研究が多くなり（古城利明他編『グローバリゼーション/ポスト・モダンと地域社会』東信堂 2006 年、永岑三千輝他編『ヨーロッパ統合の社会史』日本経済評論社 2004 年、オックスフォードの Inter-Disciplinary.Net など）、新しい社会学事典の項目に「グローバリゼーションと地域主義」を意識した項目が挙げられた。「第一近代」において富の再配分の要件上、閉じられた社会/社会関係としてあった国家、家族、企業、地域なども、流動する資本・商品・人の増加とともにグローバル化の中におかれているともいえる。

2007-9 年度基盤研究 C「グローバル化における『地域』概念の変容－フランスの周辺地域の文化活動を事例に」において、社会学的な視点から「地域(region)」等領域を示す用語の歴史的使用方法と概念の整理、主にアルザスとコルシカの地域文化運動拠点、グローバル化された文化、複数地域横断する間地域領域(tri-reggio)の地域文化の動態、階層性、消費される文化の記号について地域文化の表象の違い、表象のされかたの違いを確認した。フランスの地域研究で得た知見は EU の辺境地域においても適応されるのか検証することが課題として挙げられた。

２．研究の目的

本研究ではヨーロッパの辺境地域を対象に、その場所でなければならない「固有性」と「特異性」の空間的実践、使用価値としての地域の空間表象、表象の空間という点から、地域文化の越境性と境界性を実証的に分析することを目的とした。

(1)越境性：グローバル化によって持ち込まれた諸基準や国際市場での競合は、言語やその他の地域文化活動にどの水準で、どのような階層の人々によって推進されているのか。近年、地域間交流や EU の各種会議、アドバイザー制度などによって、行政職員や研究者、NPO や文化活動家の交流は多くなり、そこでの知識と技術の共有化が進んでいる。これが各地域社会においてどのように再構造化されて組み込まれているのか考察する。

(2)境界性：地域内外の人に消費される地域文化が、いかにグローバル化されたパッケージや表象や記号をまとっているとしても、なぜ他の地域文化との差異と独自性を再構築しながら保てるのか。地域特性や文化の固有性が、歴史的事象の再解釈によって、その地域社会にとって「固有である」と認識され、差異化されていくのか、他とも異なる「違い」の正当性を分析する。

(3)越境性一境界性：EU の辺境に位置するエストニア、スロヴェニア、コルシカにおいて、ヨーロッパ的なるものを見出し、それを自らの伝統と関係させていく過程が EU 統合とともにあったと考えられる。そのヨーロッパ的なるものが EU 内の境界線を消す一方で、EU 外との境界性を際出せる機能を持っているとすれば、それはどのようなものなのか、そしてどの担い手によってヨーロッパ的なるものは見出され、再構築され、展開させられたのかを検討する。

３．研究の方法

分析に当たっては、アンリ・ルフェーブルの空間論の≪空間的実践≫＝社会諸関係の空間的編成、≪空間の表象≫と≪表象の空間≫＝社会空間の再構造化、M.ドセルトーの「文化の政治」、地域文化の担い手を分析するための「経済資本」「文化資本」「社会関係資本」の概念を利用する。

年 2 回の研究会と 2 名以上で 1 回の現地調査調査を行い、対象地域において、地域文化活動家、知識人、そしてそれらの拠点を空間的実践、空間の表象、表象の空間という視点から現地視察と半構造化エンタビューを実施した。

４．研究成果

EU の周縁地域として主に 4 つの国と地域を選定し、現地調査を行った。ロシアとの差異化を図り、EU と接近するラトヴィア、特にダウガウピルス、旧ユーゴスラビアからもっとも早く独立し、オーストリア・ハンガリーの文化圏に位置するスロヴェニア、EU への加盟が滞るマケドニア、一にして不可分なるフランスに対して EU 内での地域として文化振興を図るコルシカである。これらの調査は期間の制限と質問調査の対象が限られているため、仮説の域を出ない多少の偏りがあることを留保したうえで、越境する力と中心に吸収される重力で分裂しつつも絡み合い重なり合う地域社会を再考した。

そこから得た知見は以下のとおりである。領域が集合的紐帯を維持するため文化的意味を必要とする場合、それは不完全な領域にならざるを得ない。それは 2 重の意味においてである。一つは、内部の要素から構成される集合的紐帯としての意味、たとえば歴史や伝統、英雄、言語といったものは、その空間と時間の狭間で人為的に構築されるものであり、本来異なる意味経験をもつ人々からなる集合に完全に共有されることはないからである。戦時など、脅威となる他者との対峙において一時的に意味が共有されたとしても、それが永続する保証はない。もう一つには外部との関係性は常に変化し、外部からの人の移動、モノ・カネの流動によって意味を変化させ、領域の境界性の濃淡そして境界の位置すら動かす可能性がある。こうした文脈において、どのような他者と対峙するのか、

協働するのか、その時代によって領域は同一体であろうとするために選択し、政治的に集合的紐帯の意味－文化－を変化させるのである。

今回の調査研究において、5つの地域はEUの加盟過程でそれぞれの文化の再解釈を行い、それぞれが対峙する他者が異なるために異なる文化的実践を行っていると暫定的に確認された。EU 基準への準拠、世界遺産への登録や観光地化、市場経済、人の移動によって成果標準化のような越境性の空間的実践が多くみられる中、領域をまとめる集合的紐帯の文化実践では、隣国の権力の強弱、人口規模、主要産業、政治体制の安定性、占領経験を含めた歴史、EU 制度との親和性の差異がどのように文化を表象するかの違いを形成している。

以下、各調査の概要である。

(1)ラトヴィア調査

調査年月日　2012 年 2 月 27 日—3 月 2 日

調査地と調査対象

・ラトヴィア　リガ　市場、占領博物館、ユダヤ人博物館、統計情報センター

・ダウガウピルス（ヴェラルーシ国境近くロシア語話者の多い地域）
第六小学校　ダウガウピルス要塞　民族博物館

面接調査　社会学者　1 名
ダウガウピルス　第六小学校教員 6 名

ナチスの占領以降、ソ連占領期も強制移住を歴史的記憶としてとどめ、博物館においても学校教育の中でも大国の占領と強制移住を表象する。リーガの街も交通の要衝であったことからドイツ騎士団以降の占領の後である歴史建造物が遺産として空間的実践が展開されている。独立し、EU 加盟後にはドイツとスウェーデン資本が流入し、金融資本主義の見えにくい占領と、ローン返済のための出稼ぎ移民の増加という移住は「自由主義」の中にも見出せる。独立後、国際競争の中で脆弱化した国内製造業と本来主力産業であった運輸を本格的に拡充し、ラトビア語という文化的独自性を保つ砦を維持しつつ、ロシア経済圏とのかかわりで市場を確保しようとしている。大国に占領され続けた歴史とそれを国民の歴史認識とする社会において、経済停滞期と人口流出を抱えた時期に、ラトヴィア語を唯一の公用語とする文化の選択は独立国家として存在し EU 側にいることを選択する小国のサバイバルとして解釈できる 。

⑵スロヴェニア、マケドニア調査

調査年月日　2013 年 2 月 27 日－3 月 8 日

調査地と調査対象

・スロヴェニア（リュブリヤーナ、ノヴァ・ゴリツァ）
現代史博物館、旧市街地、ノヴァ・ゴリツァ（分断博物館）

・マケドニア（スコピエ、テトヴォ）

・テトヴォ　民族博物館、アルバニア人居住区

・スコピエ　旧ユダヤ居住地区　ホロコースト博物館

面接調査

スロベニア

・Tanja Petrovic（Center for interdisciplinary Research in Scientific Research Center of the Slovenian Academy of Sciences and Arts リュブリヤーナ大学)、

・ Dr. Aleš Gabrič Institute of Contemporary History)

マケドニア

・Valentin Nesovski　EU インフォメーションセンター

・A.J. Arno van der Pas(OCSE Programme Co-ordinatior Inter-Ethnic Relations)

旧ユーゴスラビアの諸国は社会主義でありながら旧ソビエト諸国とは政策を異にしていること、1970 年代から「西側諸国」との交流は生活水準においても物流といった経済的水準においてもつながりがあったため社会主義時代を完全に否定した形で現在の街や文化を構築しているわけではないこと、かつオーストリアを主とした中欧との歴史的つながりのなかで経済圏、文化圏を再構築し、ヨーロッパとの親和性を探求し、旧市街地を中心とした街の再開発と観光地化は空間的実践を行っていると観察された。EU に加盟する中で、旧来保持してきた主要産業が弱体化し、若年者の失業率も増加し、新たな製造業の開拓を模索しつつ、旧ユーゴスラビア国家との繋がりを強化することで市場を広げることを考えている。

マケドニアでの調査は他の国と地域が全て EU に加盟していたため、逆に EU の内外の差異を明確に知ることができた。第一に、インフラを含めた EU の規格や形式が実のところ空間の表象として EU の境界を際出せていることが際立っていた。政治的な制度や産業上の規格の違い、道路や鉄道を含めたインフラや他都市とのネットワークの不足といったものが空間の表象に大きな差を与えている。ラトヴィアは北欧やドイツの金融・産業ネットワークの中にあり、スロヴェニアはオーストリア経済圏におかれ、イタリアとのネットワークがある。こうした経済的バックグラウンドが弱く、トルコへの経済的依存度を強化すれば、逆に EU との距離ができてしまい、オフリド合意以降の民族政策で国内の文化的紐帯は作りにくくなっている。

⑶フランス・コルシカ調査

調査年月日　2014 年 2 月 7 日－2 月 14 日

調査地と調査対象

Palais Fesch-musée des Beaux-Arts
Musée Départemental Pascal PAOLI
RDP：Centre Régional de Documentation

Pédagogique de Corse
Home of Napoléon Bonaparte
Musée régional d'Anthropologie
面接調査
・Alain DI MEGLIO(Directeur des études a l'ESPE de Corse ESPE: Ecole superieure du professoral et de l'education
・Marion TRANNOY Chef de service et Responsable du Musée de la Corse Musée régional d'Anthropologie
・Jacque Thiers Directeur de Center cultural Universite Corse

1970 年代の地域文化復興期においての言語復興活動および 80-90 年代の言語教育展開期の活動の経過と現状を聞き取り、コルシカ語は公用語するための言語計画の途上にあり、フランスの他の地域語よりは地位は高いものの、教育においても選択科目でしかないこと行政的にも公用語ではないことが語彙を増やし話者を増やすことになっていないことが確認された。フランスの中でのこの権利要求は難しいものの、EU の他地域とのネットワークの中で情報を蓄積し、地域全体の要求として継続的に公用語化の権利要求をする方針は変わりない。そして、前回調査の 2009 年と比較して、ICT の進歩がテキストだけでなく AudioVisual 面においても豊かになっていた。また、博物館は現在のトレンドでもある、社会史を取り入れた展示、何を無形文化財とするか世界遺産登録を射程に入れた地域文化の発掘と展開を手掛け、手作りというより制度化され、洗練された質の向上が進んでいる。展示内容も地域にとっての文化の核の保存という視点よりも、個人史の集積としての地域、地域外部の視点からも見るに堪えうるものという反省的視点を取り入れた展示をしている。コルシカの独立政府を築いたパスカル・パオリ博物館は彼の出身村にあり、アクセスは不便だが存在する。そして、ナポレンオン博物館には多言語の案内が整備され、出版物も豊富で、街中にあり、フランスのナショナルヒストリーに位置づけられるコルシカがある。この対比はフランスの一地域であり、コルシカ特有の歴史があることは認められている今のコルシカの政治的地位を表象している。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）
〔雑誌論文〕（計 3 件）
①定松文、文化の政治的選択と社会空間－ラトビアにおける言語選択と実態調査をもとに－、恵泉女学園大学紀要、査読有、26 号、2014、157-175.
②小森宏美、少数民族にとっての文化自治ーエストニアの極小マイノリティであるユダヤ人を事例として、孝忠延夫・安武真隆・西平等編、多元的世界における「他者」、関西大学マイノリティ研究センター最終報告書、査読有、2013、291－309.
③小森宏美、「マイノリティ」と国民国家－エストニアの歴史的経験からの一考察」『マイノリティという視角』関西大学マイノリティ研究センター中間報告書、査読有、2011、255-279.

〔学会発表〕（計 0 件）

〔図書〕（計 11 件）
①小森宏美、社会的分断とソシアルの意味ーエストニアにおける社会統合の模索、森明子編、ヨーロッパ人類学の視座ーソシアルなるものを問い直す、世界思想社、2014、223－249.
②小森宏美、過去の克服としての「新自由主義なるもの――エストニアの社会正義観と改革党の成功、査読有、村上勇介、仙石学編、ネオリベラリズムの実践現場、京都大学学術出版会、2013、111-136.
③小森宏美、紛争回避のメカニズム――エストニアを事例として、月村太郎編、地域紛争の構図、査読有、東洋書房、2012 、213-235.
④小森宏美、エストニアの安全保障観と NATO、広瀬佳一、吉崎知典編、冷戦後の NATO－“ハイブリッド同盟”への挑戦、ミネルヴァ書房、2012、149-165.
⑤小森宏美、国と国際が溶解する空間としてのバルト地域、塩川伸明・小松久男・沼野充義編､ユーラシア世界第 5 巻国家と国際関係、東京大学出版会、2012、95－117.
⑥定松文、地方分権は公正な社会を可能にするのか、宮島喬・杉原名穂子・本田量久編、公正な社会とは、人文書院 2012、56-77
⑦小森宏美､エストニアを知るための 59 章、明石書店、2012、362。
⑧陳天璽、近藤敦、小森宏美、佐々木てる、越境とアイデンティフィケーション―国籍・パスポート・ID―、新曜社、2012.
⑨百瀬亮司、セルビア語読解入門、大阪大学世界言語研究センター監修、大阪大学世界言語研究センター、2012.
⑩柴宜弘 監修、百瀬亮司編著、旧ユーゴ研究の最前線、序文にかえて ―「 旧ユーゴ」をめぐる地域概念に関する一考察―、溪水社、2012.
⑪小森宏美、エストニアとラトヴィアの政党政治比較－歴史的要因としてのロシア語系住民問題を軸に、林忠行・仙石学編、ポスト社会主義期の政治と経済、北海道大学出版会、2011、203-231.

〔産業財産権〕
○出願状況（計 0 件）

名称：
発明者：
権利者：

種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

○取得状況（計　0　件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等
恵泉女学園大学ホームページ、「本学について、恵泉の取り組み、競争的資金（科研費等）による研究成果」にて報告書を掲載
http://www.keisen.ac.jp/

６．研究組織
(1)研究代表者
定松　文（SADAMATSU,Aya）
恵泉女学園大学・人間社会学部・教授
研究者番号：４０２８２８９２

(2)研究分担者
小森宏美（KOMORI,Hiromi）
早稲田大学・教育・総合科学学術院・准教授
研究者番号：５０３５３４５４

百瀬亮司（MOMOSE,Ryoji）
名古屋市立大学・人文社会系研究科・研究員
研究者番号：００５０６３８９
平成 23 年度のみ

(3)連携研究者
（　　）

研究者番号：